

周到的準備とリハを重ねて臨んだ EBS のバージョンアップへの取り組み

当社が10年来、保守・サポートを行ってきた企業において、ERPパッケージ「EBS」のバージョンアップを行った事例を紹介いたします。最小のダウンタイムで周辺システムには手を入れず、EBSとハードウェアのみ更新するという難題に対し、当社は段階的移行と周到的準備を提案、同社の協力も得て、バージョンアップを成功させることができました。当社ではこのノウハウをさまざまなお客様の支援にも役立てていく考えです。

EBSだけのバージョンアップにチャレンジ

親会社の製品の国内販売を担当するこの企業は、会計・在庫・受注・購買といった業務分野において、オラクル社製ERPパッケージ、「EBS」(Oracle E-Business Suite Financials/Supply Chain Management)を2000年に導入しています。当社は、10年以上にわたって保守・サポートを担当してきましたが、導入時から使い続けてきたEBS R11の保守サポートが終了するため、IFRS対応なども視野に入れたR12へのバージョンアップを対応することになりました。

今回のバージョンアップの課題は、2日半のダウンタイムで、アジアでは初めての事例となるEBS R11からR12への2段階バージョンアップ(R11→R11i→R12)を行い、同じくサポート切れの懸念のある老朽化したサーバ・ハードウェアも一気に刷新するという点です。

導入アプローチは、(1)R11からR11iへのEBS標準部分のバージョンアップ手法として、オート・アップグレード(Auto Upgrade)を使用する、(2)R11iからR12へはテクニカル・アップ

グレード(Technical Upgrade)を使用する、(3)R11環境で使用していたアドオン・プログラムはR12環境へのアップグレードの影響度合いに応じて修正または新規開発を行う、(4)周辺システムとのインタフェース部分は変更しない、というものです(図-1)。

また、サーバ・ハードウェアについては、10年前のサーバと最新のサーバでは、CPU(PA-RISC 32bit→Itanium 64bit)もOS(HP-U X 11.11→HP-U X 11.31)も異なるため、アップグレード作業用に複数のサーバ環境が必要となるとともに、追加の手順も必要になりました。

段階的移行と念入りなりハースルを実施

当社は、課題解決の方策として、サーバアーキテクチャ(CPU、OS)の変更を吸収しつつ、段階的なバージョンアップを行い、データ移行も併用してダウンタイムを目標に合わせることにポイントを置きました。

バージョンアップ作業の前半(EBSをR11iにアップグレードする作業)は、お客様の実機で行う必要がありますが、業務運用

中の実機は使用できないため、作業を進めるには、この実機と同等(同一アーキテクチャ)のサーバを用意する必要があります。しかし、10年前の機種という理由から国内での調達には難航し、海外より調達(レンタル契約)するなど思わぬ苦労もありました。

このレンタル・サーバ上に再現した実機環境でバージョンアップ

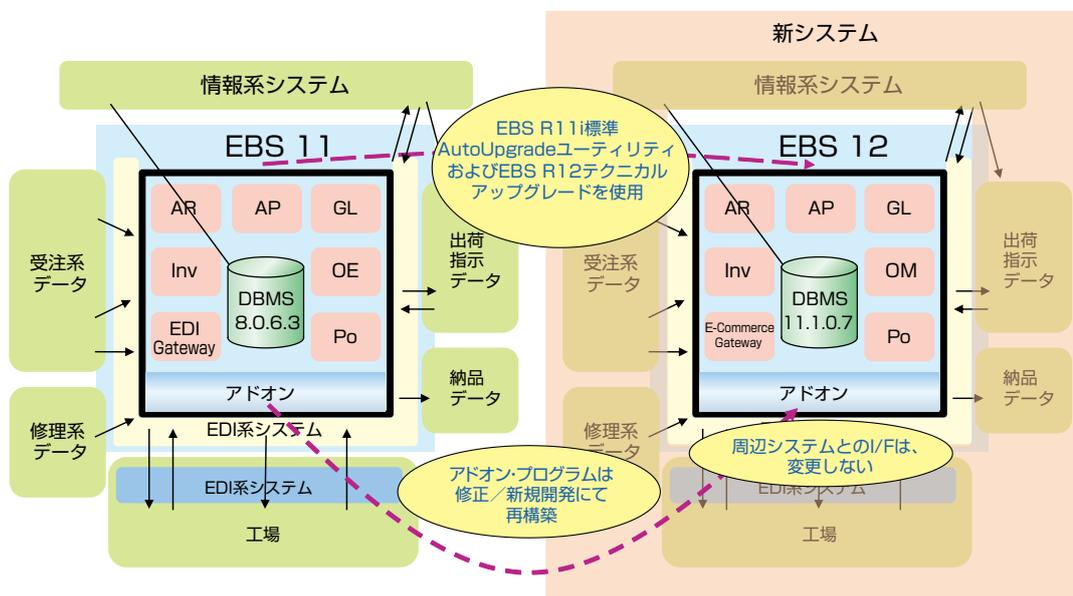


図-1 バージョンアップの要件

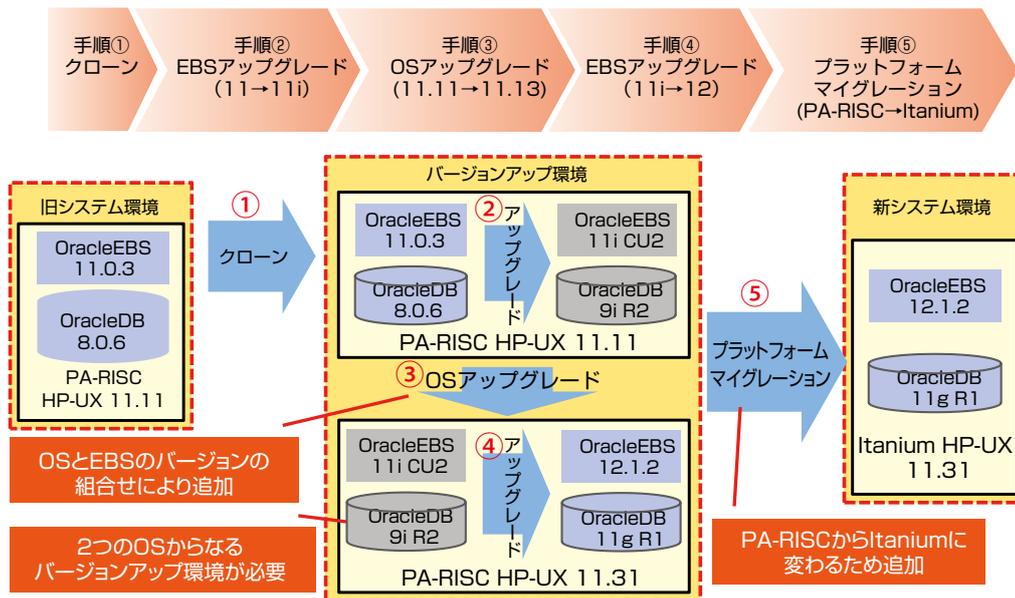


図-2 アップグレードの手順

作業を開始し、まずはEBSをR11iにアップグレードすると共にDBを改訂(Oracle 8i → 9i)し、次にOSを改訂(HP-U X 11.11→HP-U X 11.31)しました。この後、作業環境を新サーバに移し、EBSをR12にアップグレードすると共に、再度DBを改訂(Oracle 9i → 11g)しました。最後に、CPU変更によるプラットフォーム・マイグレーション(プログラムの再コンパイル)を行いました(図-2)。

バージョンアップ作業を確実に実施するために、随所に独自の工夫を凝らしました。2日半のダウンタイムでのシステム切り替えを実現するために、今回は15日間のバージョンアップ作業期間中に発生した受注残データなどについては、バージョンアップ完了後のEBS R12に移行プログラムを用いて投入する方式を採用しました。これは、バージョンアップ手法である「アップグレード方式」と「リ・インプリメント方式」の長所を組み合わせた、いわばハイブリッド型のバージョンアップ・ソリューションです。この方式を用いれば、既存のデータ資産をそのまま移行でき、かつ最小のダウンタイム(今回は金曜夜～日曜の2日半)でのバージョンアップが可能となります。

また、もう1つのポイントは、周到な計画と準備です。当社では、プレリハーサルとリハーサルを本番作業と同じ時間帯を使って行いました。同じ作業手順を計3回繰り返したことになりますが、その手順書を作成する段階で、同社と、作業担当、役割、作業標準時間等の詳細な計画を立てました。こうした万全の準備が結実して、本番は予定通りに進めることができました。

また、バージョンアップ成功の判断基準を事前に同社と協議して決めておき、本稼働可否の判定は2時間でできるようにしました。情報システム部門だけで判断できない項目もありました

が、同社の他部門の多くの人員を土日に待機させることのないよう、事前に「この状況ならOK」という「判断基準」を得て、情報システム部門の判断に委譲できるようにし、同社の負担を低減するよう配慮しました。成功のポイントとなった周到な計画と準備ですが、夜間作業の立会いなど、同社にさまざまな協力を得られたことも大きかったと考えています。

EBSの移行ノウハウを駆使した横展開を

当社では、今回のバージョンアップで、最新のインフラ環境が整備されたことにより、EBSに蓄積されたデータの分析や活用、経営課題や環境変化に追随した情報戦略が立てられるようになりました。

また、Windows7クライアントPCでの稼働が可能となり、利便性が上がった、当初の目的であったIFRSの準備が視野に入れられるようになった、リモート保守や遠隔同期などの最新機能やサービスを利用できるようになった、といったメリットも実感されています。

現在、当社は、同社に対してDRサイトを構築しているほか、予防保守、すなわちシステム障害が起きない仕組みに変えていくといった提案も進めています。

当社では、今回、半年を費やし、ゼロからEBSバージョンアップの手順書を作成しました。手順の条件分岐や処理結果の解釈の仕方についても、その都度確認しながら手順書としてまとめており、当社の重要なノウハウとして蓄積できたのは、大きな成果だったと考えています。

今回の事例は今後も発生するものと思われれます。異なるサーバ・アーキテクチャ間のEBSバージョンアップについては、このノウハウを活かして横展開していくとともに、レンタル・サーバの機種選定や調達などについても、環境構築ソリューションとして、お客様に提供していく考えです。

さらに、EBSのバージョンアップにとどまらず、全面刷新を含め、EBSを導入したユーザが抱える課題について今後の指針をアドバイスできるよう、アセスメントなどで協力させていただき、さまざまな提案をしていけるよう取り組んでいきます。

(SIソリューション事業部 宮田 学)